

## アメリカ史学の旅

清水博

これは私のアメリカ史遍歴の貧しい旅の一記録である。アメリカ史をえらんだ理由は何かなど学生諸君に聞かれることがある。不勉強ではあったが私なりに歩いたあとをふりかえって、できることならば、今後の勉強の足がかりとしたいと思うのである。またアメリカ史を学ぼうとする人の何らかの参考になれば望外の願いともいえよう。

私は元来身心ともに弱かったこともあって、人と競争することは好きでなく、闘争心というようなものも持た合わせではないなかった。強いていえば自己に鞭打って、自分のペースを従来よりも上げることが他人との競争に代わるものであった。他人をむきになって打負かすのはできもしなかったであろうが、嫌いでもあった。とはいえ、負けるのはいやである。それゆえひとりでマイ・ペースで歩くより致し方がない。私は、療養後期の回復期において、散歩から低山、高原、峠路の山歩きを楽しんだ。人のいない山の中に自分を沈めて自然を眺め、自分を眺め、人間の社会を考え

アメリカ史学の旅(清水)

た。山歩きの中で地図や地形の見方、両者の照合を覚え、出発点から地図と地形を照合しながら歩いていけば、迷うこともないことを学んだ。そしてやがては自己流ながら用心深い準備で北アルプス、八ヶ岳、上信越の山や尾瀬などに足を入れた。それも今のように登山人口は多くなく、しかも最盛期の山をさけたから、私にとって常に山は静かで楽しい思い出であった。上高地にバスが入らない頃はほんとによかったと思っている。志賀高原の冬も、上林から歩いてのぼる時代で、発晴の宿も正月三が日をすぎるとスキーヤーがいなくなってしまった。

私の歴史の専攻分野であるアメリカ史の選択にも、今から考えると、こうした山行のあり方とかなり密接な関係があるように考えられる。西洋史学科をなぜえらんだかということはここでは触れないことにして、アメリカは日本の西洋史学界では余り登りてのいない巨大な山塊であった。手近かにあるこの大きな山になぜ目をつけないのかよくは

分らないが、昭和初期までなにごとにつけても日本人の目はヨーロッパに吸いつけられていたと思う。太平洋は今よりも遙かに広く、アメリカは隣国といっても捉え所のない遠い物質文化の国で、精神文化の点ではヨーロッパの垂流にすぎないと考えられていた。その物質文化も二九年の大恐慌以来魅力を失ってしまい、ますます関心をひきにくくなっていった。しかし私は賑やかなヨーロッパの登山家群にあり込む気はしなかったし、アメリカ史研究の必要性は知っていたので、登山家の少いアメリカ史に目標を定めたのである。まだ余り荒されていない所なら、のんびり歩いていてもそれなりの興味も湧き、収穫もあるだろうと、自分の能力を考えた末の決定ではあった。しかしこの決定は今になって考えれば、余りにも甘かったし、盲蛇におじずで、もともと努力しなければほとんど一つの小山も探索できないということが今になってわかった。

こうしてまずアメリカの自然地理などの研究の準備から始めた。位置、地形、気候、森林、草原、河川交通、動植物など一通り知っておくことが植民地の建設や西漸運動の理解には特に必要である。今は学生でも実際に旅行して見聞する機会があるが、私の頃はまず無理であった。史料の乏しいアメリカ史においてまず思いつくことは、日米関係の研究であり、太平洋岸に近い地域の歴史である。私の学

生の頃は法学部のヘボン講座の高木八尺先生の講義が唯一のアメリカに関する講義である。先生の明快な講義により多くの基本的な知識を与えられ、同時にターナーの「アメリカ史におけるフロンティア」の紹介をうけ、これによってアメリカ的なものの考え方を知った。さらにターナーの「セクション」とか「新西部」などをよむようになるが、それはのちのことである。ターナー説はその後いろいろな批判や実証を経て、抽象的、ロマン的なものではなくなつたが、当時の日本にはターナー説を検討するに足りる社会経済史的資料は存在しなかったと思う。西部の農業や交通通信の歴史の実証的研究はアメリカでも一九二〇年代からである。「農業史学雑誌」の刊行が一九二七年からであり、「ヒバードの「公有地史」」の出版が一九二四年であることで明かであろう。日本でも最近では西部の特定地域の農業や交通の基本的研究が若い学者によって始められているが、その史料はアメリカの未刊行資料によることが多い。

このようにターナーに触発されて西部のフロンティアの進展と領土の拡大という問題に興味をもち、大学の卒論ではマニフェスト・デスティニーの具体化である一八四六年のオレゴン領の獲得を「オレゴン問題の解決」という題で書いた。一八四六年、イギリスが事実上支配していたオレゴン地方の土地において、アメリカに対し過大と思われる

譲歩を何故にしたのであろうかというのが私の問題点であった。キャザリン・コーマンの「極西部の経済的起源」という二巻本は、この地方の開拓の詳細をアメリカ側から記したもので、私の主として依拠したもの、他には数冊の主要参考書と、アメリカン・ヒストリカル・レビュー所載の三篇の関連論文が手にしえたものの総てであった。

一九世紀初期からオレゴンとよばれた太平洋岸地域の中のコロンビア河口の地味肥沃で気候に恵まれた地域に一八四〇年からアメリカ人の移住が急速に進み、オレゴン熱と呼ばれる移住ブームが起こった。その結果、その地方を領有していたハドソン湾会社が移民進出の勢におされて後退し、さらに大統領ポークの強引な要求に屈してイギリスが現在の米加国境に譲歩したかくれた理由を探るうという平凡なものであった。私はこれを綿花などが必要とする経済事情、とくに一八四五年から悪化したドイツやアイルランドを襲ったポテト饑饉に結びつけようとした。多量の食糧をアメリカから買付け、反対にアメリカに多数の餓死に瀕したアイルランド移民を送らねばならぬイギリスの事情が、大国の面子をも棄てて譲歩のやむなきにいたらせたことを、主として貿易統計や人口移動の数の変化から推論したもので、イギリス側にそのような譲歩に関する直接の史料があるかどうかは未知であった。従ってこの推論にど

アメリカ史学の旅(清水)

れほどの真実性があるかには全く自信がなかったといってもよい。ただ各般の情勢から、かなりの真実性を推定したにすぎなかった。

ところが最近になってハーヴァード大学の名誉教授フレデリック・マーク著の「オレゴン問題」に関する論文集(Frederick Merk, *Essays in Anglo-American Diplomacy and Politics*, 1967)を入手したが、この中にアイルランドの饑饉とオレゴン問題の関係についての論文がある。この論文は元来、一九三四年の「農業史学雑誌」第八巻第三号にのせられたもので、私の卒論を書いていた同年に書かれたものである。当時この論文の所在も知らないし「農業史学雑誌」という薄い季刊誌の存在すら知らず、おそらく私には見ることも不可能であったろうが、これを知ったとき同じような着想があったことに驚き、かつほっとした気持ちになった。マークはターナーの弟子である。

この後のことであるが、日本のアジア大陸進出にともなう、植民地経営に現地で活躍した人物を中心とした歴史双書を出そうという企画があつて、私にもアメリカにもそのような人物がいるであろうから書けということであつた。イギリスではローレンスとアラビア、セシル・ローズと南アフリカ、ヘースティンズとインドなどの例が直ちにあげられるのにアメリカではこれに匹敵する人物が思い

浮ばない。アメリカにとって植民地とは何か。少くともアメリカは准州から州へという政治過程で、後進地域である獲得領土を連邦の中に吸収していった。表面上区別しない。しかし西部はセクションとして東部と関税や通貨や銀行や公有地払下げや交通手段の改良など経済問題でことごとに対立する。西部こそは植民地ではなかるうかと考えた。それにしてもイギリスの前記人物に当たる人物がアメリカには見当たらない。フロンティアマンとしてはダニエル・ブーン、デーヴィー・クロケット、探検家としてはルイスやクラーク、またはブリガム・ヤングのような変った人物もいるが該当しない。窮余の策としてトマス・ハーフト・ベントンと西部開拓という題にしたが、列国とはやや趣きが違ったものになる。ここにもアメリカ的なものがあるように感じた。とにかくこの本は書かず、書けず仕舞に終わったが、これで一層ジャクソン期に注意が向いた。この時代にはウエブスター、クレイ、カルフーンという三人のセクションを代表する政治家が活躍するが、経済的實力の所在地が北部ではフィラデルフィアからニューヨークへ、南部ではヴァージニア州からサウスカロライナ州へ、さらにジョージアからもっと西の綿花州へと移動する。北西部でも南西部でも人口が増え、いわゆる「コモン・マン」が台頭する。この西部とコモン・マンの活動がさらに西部への

発展を刺激し、歴史的エネルギーを国内開発へ結びつけた。これが外交的にはモンロー主義の基盤となり、またマニフエスト・デステイニーになった。戦争初期に「二つのM・D」という小論を書いたが、それはこの二つの頭文字をとったものであった。こうして興味の対象はジャクソン期を中心とした時代に定着してきた。

アメリカでは一九四四年にピューリッツァー賞をえて有名になったシュレシンガー・ジュニアの「ジャクソンの時代」が出たが終戦後も外貨不足で名ばかり聞いていてこの本の入手に手間取った。日比谷の現在の日生ビル所に「アメリカ文化センター」ができ、ここが本や資料を見うる唯一の所であったから、各方面の人がきていて、戦争中に絶えていた消息の交換の場でもあった。デモクラシーの波にのってジェファソンやジャクソンの民主主義が関心のまとなった。独立と南北戦争の中間にあった谷間にも探求の手のび出したのであり、日高明三の「ジャクソニア・デモクラシー」が出版されたのもこのような世相を反映してのことであつたと思う。ジャクソン時代の史学史的考察についてはジョン・ハイアム編「アメリカ史像の再構成」一九六二年(同志社大学アメリカ研究所訳、小川出版)の中のウオードの論文があるから、これを参照したいが、ジャクソンの時代は、よくも悪くもアメリカ的社会の形成期

であり、まだ社会の構成要素が流動的な時期であつた。従って粗野で荒けずりであつても個人の活動の余地が大きな時代であつたと思う。コモン・マンとは西部の農民か、都市の勤労者か、新興の企業者たちのいずれであるかとの問題が、アメリカでも第二次大戦後論争の対象となつていくが、少くとも日本でも戦後の混乱期は旧社会が一旦くずれ、新しい社会機構もでき上つていなかった時期であるから、いわばジャクソン期に似ているように私には思えた。これもジャクソン期に魅力を感じた理由であるが、だからといってこの混乱期に研究を進めるだけの余力は私にはなかった。

その混乱が収まりかけたころ、東大とスタンフォード大学共催のアメリカ研究セミナーが開かれ、五三年には当時ジョンズ・ホプキンス大学教授であり、南部史の優れた学者であつたC・ヴァン・ウッドワードが歴史部門の講師として来られ、三週間にわたつて南部史の講義をしたが、ジャクソン期から南北の対立は次第に深まるのであり、南部に関心をひろげる機会となつた。一九五五年から六年にかけての渡米の折に私は西部及び南部を中心になり歩き廻り、読書ではえられない現地での知識と感触をえた。前記セミナーでの南部の関心はジョンズ・ホプキンス大学一年の滞在で深められ、関心は再建期に広げられることになつた。

#### アメリカ史学の旅(清水)

た。同教授は立教でも講演をされた。南北戦争と再建の過程における南北の関係の中には、第二次大戦における日米の関係に非常によく似た経過、類形を発見して興味があるが、今は触れないことにする。ただここにもアメリカ人の性格や、再建期の教訓、形式的平等の下における力の政治、妥協による現実的変身の手腕をみることができるように思う。

ウッドワードは南部人であり、従来の南部史が北部的勝者の観点から書かれた歴史である点を是正しようとする史家の一人であるが、彼はまた比較史研究方法を取入れた史家である。一般的に、アメリカでは実証的帰納的研究方法がとられ、演繹的方法をとることは少い。一定の歴史理論、とくにマルクスの史観の信奉者も少い。これは歴史理論が無用というのではなく、それですべてを割り切ろうとはしないからでもあるが、その結果日本のように方法論の相違による歴史家のグループやその発表誌が多くあるということはない。ある意味では各自がそれぞれの道を歩みながら相互批判の共通の広場と自由とをもっているのである。欠点といえば歴史的用語の定義の不明確さがあげられよう。たとえばコモン・マンとかヨーマンとかは何をさすか明かでないままで使用されるときである。またわが国では「問題意識」ということが緊要とされる。歴史の研究に一

定の視点を定めることは必要であるが、これを強調する余り、始めから結論を予見し、偏見をもつて接する弊をさえ生むことがある。問題意識を強調しなくても明敏な歴史家は自分の属する社会に対する自己の問題意識によって歴史を解釈するものであるが、しかしそれゆえに、しばしば後に修正を必要とするのである。革新史学のビードはその好例であろう。

今や歴史学においても情報過多の時代に入ったが、史学研究におけるコンピュータ処理は、まだわが国では行われていないから、これからの歴史研究者は大変であろう。戦前は史料の不足を補うために推論という勝手な頭の体操

のできたよき時代でもあったが、これからはさらに多くの歴史的情報を処理しなければならない。ここに緊密な協同研究体制を必要とする理由がある。それから、最後に研究と教育の乖離が問題となるが、本来的には真摯な研究の過程から教育への熱情もわいてくるし、教育の必要から研究も進歩する。研究なくしては教育もマンネリになると思う。また歴史の研究・教育の基底には利己的な国家をこえた「人間」社会の進歩のためという客観的立場を必要とすることを今さらのように痛感する。

以上の拙文は私の不敏な反省の一つとして、受取っていただきたい。